

大地

第 54 号
2017.1.25.発行
浄 國 寺
上越寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎 睦

沈香の香りかすかや彼岸堂

散る花を流して昏るる青田川

谿の奥奥へ咲き継ぐ水芭蕉

更衣して肩軽し足軽し

又忘るかきつあやめの見分けかた

トンネルの合間合間の新樹光

(平成十九年 作 九十一歳)

今年は何年

山崎隆史

今年は何年というかと西(とり)年です。十二支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)ね、うし、とら、う、たつ、み、うま、ひつじ、さる、とり、いぬ、い)には、それぞれ動物が割り当てられていて、読み方も動物の名前で読むのが一般的です。今では十二支といえども動物を連想しますが、これは後になって割り当てられたもので、最初は違う動物が割り当てられていたりしていたそうです。

古代中国人は、世の中のあらゆるものを何かに分類する事が大好きで、五行(ごぎょう、木火土金水)、八卦(はっけ、乾兌離震巽坎艮坤)などに、数字だの方角だの時刻だの様々なものを割り当てています。

十二支に割り当てたものの一つが、動物です。十二支では他に方角(子午線、うしとらの方角など)や時刻(丑三つ時、正午など)も割り当てられています。

年や日は、十干(じつかん、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)と十二支を組み合わせた干支(えと/かんし)を用います。組み合わせが六十通りあるので、六十年で干支は一周し、これを「還暦」といいます。甲子(きのえね/こ)の年に作られた球場に甲子園と名付け

たり、丙午(ひのえうま/へいご)生まれの女性は云々という迷信があったりします。今年の干支は丁酉(ひのと)り/ていゆう)らしいです。

さて、十二支を表す十二文字の漢字は、何の関連性もなく、脈絡の無い組み合わせなので、中華圏の外から来た言葉に音の近い漢字をあてたものと考えられるそうです。つまり、Americaに米利堅という漢字をあてて略して米国と称するのと同じやり方です(中国では「美利堅/美国」。よって、「酉」の字には、「鳥」とか「西方」(字は似ていますが)とか「日没時」といった意味は全くありません。「酉」の字は、今でこそ十二支以外では目にしませんが、「酒」の元になった字で、酒を入れる壺(つぼ)や甕(かめ)のような入れ物を持たどったものです。「酉」という部首があり、「ひよみ(日読み、暦の意)のとり」とか「さけのとり」というそうです。西部の漢字には、酒、酪、酎、酌、酎、醒、酔といった酒に関する文字、醸、酵、酪、酢、酸、醬といった醸造や発酵に関する文字があります。

お酒のみの人は、酉年の酉の字は徳利の形だから酒を飲む、とこじつけて言うかも知れませんが、酉の字は、字の意味ではなく字の音によって採用されたものなので、米国がおコメの国でないように、酉年とお酒に関係は無いのでした。

私の自慢

春日山町 金子和子

八十六年も生きてきて、すこしは世の人のために、なにかよいことをしてきたであろうかと、振り返ってみた。あったあった献血だ。今から三十年前、当時高田本町の四つ角に長崎屋があった。そこに献血車が来て、献血を呼び掛けていた。誘われるまま、事前検査を受けてみると「良い血ですね」と褒められた。それならと機会があるごとに献血をしていた。

献血ルームが上越大通りに新設され、快適に献血ができるようになった。それまでは、街頭に待機している献血車のなかで献血が行われていた。

一ヶ月に一回か二回、四百ccを献血していた。毎回、血液検査の結果が送られてくる。健康のバロメーターとして活用していた。

平成六年に百回に達した。
平成七年五月に日本赤十字社より献血百回にたいして、

一銀色功労権——感謝状——酒盃二を戴いた。広報しようえつ七月一日号には、写真つきで、記事に取り上げられた。パント先の会社からは、社会的功労者として表彰され金一封と表彰状を頂戴した。

六十四歳のとき、献血定年となった。それから二年後、献血定年が七十歳に延長になったと知らせがあって再開。満七十歳のとき終止符を打った。百三十九回だった。

男性の百回をこえる献血は珍しくないが、女性では皆無とのことである。女性は、貧血低血圧の人が多く、事前検査のときに失格になってしまう。私はいつも

「健康ですね。貧血は無いですよ」と褒められていたので継続できたのだと思う。八十六歳のいま、持病もなく、年相応の膝痛だけが悩みである。一人で上京して美術

を觀賞し、各所の名所旧跡を訪ねる力も衰えていない。

これは長年の献血にたいするご褒美かなと思ひ、病気の人の役にも立ったこともあったであろうと自画自賛している。

名前が出てこない

山崎隆昌

今年七月忌を迎える母は、九十歳過ぎても入れ歯知らずで、驚くほど歯が丈夫であった。その母に似たのか、幸い私も歯が丈夫だ。今、半年に一度の歯科健診を受けるのみ。

昨年の盛夏七月、定期の歯科健診に行った。待合室の椅子に腰掛けて本を読んでいると、

初老の男性が入って来て向かいの椅子に。私が顔を上げると、その人は親しそうに笑顔で話しかけて来られた。

「山崎さん、久しぶりです。お変わりなく、まだ老人ホームにお勤めですか」

どなただろうと頭の中で考えるが、全く思い出せない。それでも当たり障りのないように「おかげさまで何とかやっています。こちらも

もお変わりなく。老人ホームには週二、三回行っています。仕事など無いのですが」さらに重ねて話しかけられる。

「お寺の方もあって大変でしょう」何処かでお会いた気が少ししてきた。が、名前が出てこない。福祉の関係、寺の関係、町内等あれこれ想像する。しかし暗闇のまま

「そうですね」「まあまあです」「いやア」「それほどでもないですが」「ぼちぼちです」汗をかきながら会話にならない会話が続く。

その日に限って、診察の声がなかなか掛からない。その人は当方の事を良くご存じのように、いろいろとお話しされる。

焦るほど、名前は奥深く入り込んだまま。

「山崎さん、お待たせしましたどうぞ一ハツとしながら、精一杯の笑顔で言った。一どうもまた、ではお先に失礼します」

「祖母も父も母もそれぞれ記憶が良かった。情けないことにこの点で私は鬼子だ。今後我が記憶はどうなることか不安の日々だ。」

融通無碍の人

宮越光昭さんの語り口

山崎隆昌

昨年暮れの二十六日、私たち夫婦にとつて大切な友人、宮越光昭さんが亡くなられた。享年八十八歳。宮越ご夫妻から、十五歳以上も年下の私たちと親しく交わりをして頂いた。

四人は毎年のように一泊か二泊の旅行をしてきた。最初は酒田・鶴岡から羽黒へ、翌年は上杉ゆかりの米沢から喜多方さらに大内宿へ、ある年は井波から黒部、別の年には甲府の佐渡屋ワイナリーから八ヶ岳を経て別所温泉までの旅、また笠間、益子そして日光へ。

四人で車一台の旅、『次郎物語』の無計画の計画よろしく、状況に応じ自由気ままな旅である。美しい景色、建物や美術品、所どころの美味しい食べ物などを十分満喫した。

宮越さんは、屋台店などと立ち食いされる。悪戯っ子のようにニコニコ嬉しそうだ。いつだったか栃尾市の美術館に行ったおり、宮越さんの強いご希望で、栃尾の名物油揚げの揚げたて熱々を、雁木通り店前の長椅子に四人並んで腰を掛け食べたことを思い出す。

けれど、旅行での一番の楽しみは宮越さんのお話で、その土地、その土地に関わるお話を興味深く聴かせて頂いた。あるいは定子夫人とされる会話も上品でかつ面白かった。

旅行に限らず宮越さんのお話しはいつも魅力的だ。おだやかに、淡々と静かに楽しそうに話される。気負いや気取りがまるで無い。しかし、時間をお話をお話の思ひだし反芻してみると、上質な大学の講義か文化講演会を聴いた後のように、何かしら知的な満ち足りたものを覚えるのだ。

話の中に、写真家の濱谷浩、陶芸の齋藤三郎、酒博士の坂口謹一郎、版画家の棟方志功、哲学者谷川徹三等の名前が出て来る。それが当たり前の出来事として普通に話され、聴く方も当たり前に、ふむふむと素直にうなずく。良寛が表したものに『戒語』がある。言葉の使いや会話について戒めたもの。一、言葉の多き、一、言葉のはやき、一、都言葉などおぼえ、したり顔でいふ、云々、さきつには、一、学者くさき話、一、風雅くさき話、一、さとりくさき話、と続く。

宮越さんの静かな語り口が『戒語』と重なる。くさきことと言えば、昭和五十四年、浄國寺の庫裡建て替えに合わせ、裏庭もやり直すことにした。工事後の何も無い庭を前に病で声帯を失くした父武雄が筆談で言った。「良寛は“くさきもの”として、絵師の絵、書家の書、歌詠みの歌といっておられる。私は庭師の庭は嫌ですよ。自然の庭がいい」。父は終戦後すぐに教員を辞めた。宮越さんが、父の短い教員生活の最後の教え子であっ

たのも一つのご縁である。

通夜お斎の席で、高等工業専門学校で教鞭をとられている息子さんが、私たちのテーブルに挨拶にみえられた。そのときに妻が

「宮越さんは我が家でとても大切な人で、沢山のことを教えて頂きました。私の家では宮越さんこそ、高田の文化人と言っています」

聞かれた息子さんが笑いながら話される。一ある時父は名刺を作りたいと言いつつ出しまし、てね、その名刺の肩書は「エセ文化人」とすると言うのですよ」

一エセ文化人—には、は宮越さんの一遊び心—だと簡単に片付けられないものが残る。

一〇〇評論家—「△△研究家—などの肩書が幅を利かす現代において、宮越さんの「エセ文化人」の肩書は、悲しみを含む風刺、強烈なブラックユーモアのように思われる。

良寛の戒める「くさき」とは、似非（えせ）似て非なるものことだろう。

私たちの旅行は一昨年六月の、魚沼の六日町温泉から八海山、そして出雲崎の良寛記念館が最後となった。八海山頂上からの眺めも素晴らしかったし、雨の良寛記念館もゆっくり楽しめた。

宮越さんとの交わりで、私たちは豊かな、温かい言葉のやりとりを出来たことを幸せに思う。今はただ、感謝するばかり。けれど、もうあの語りを聞けぬのは、口惜しく寂しい。

ワン公物語⑮

華のつばやき

山崎 華（慎子代筆）



私は華。パグ犬の雌。今年は十才になる。私にはワン公友達が何人かいる。何匹でしょうって？良いの、何人で。匹なんて言っちゃうとまるで犬みたいでしょう。

黒ラブのオンニちゃんは結構長生きだったんだけど、三年前に天寿を全うしてもういない。オンニを我が子のように溺愛していたゆうこさんは、今でもオンニちゃんが忘れられず（忘れたくなくて）次のワン公に出会えないでいる。

まゆみさんと一緒に暮らしているキャバリエのアンは、私と同じ年。まゆみさんがアンなんて名前を付けちゃったから、私としてはどうも呼びにくい。呼び捨てても気が引けるけど「アンさん」では関西風だし、「アンちゃん」もちょっとね。ごめんね、他人の名前にイチャモンつけて。

アンはとても賢い。まゆみさんの言ってることや、その時の自分の置かれている状況をよく心得ているのだ。まゆみさんはとても忙しい人なので、時折アンを面倒を見られないことがある。そんな時は知人のご夫婦が、孫でも見るような愛情を注いでアンを預かってくれる。

自宅に居る時のアンは極めておとなしく従順で無駄吠えをすることもないし、騒ぎまわることもない。ところがおじさんの家では、これが同じアンかと戸惑うくらい、際限なく甘えてはしゃぎ、おじさんが少しでも側を離れると、来てくれるまで呼び続けるんだって。自宅に居る時は、一人でお留守番することだってしょっちゅうあるのね。

ある時、やっぱり事情があつてしばらくおじさんの家に逗留して自宅に戻った時のこと。まゆみさんが、それまで見たことのないアンのはしゃぐ姿に不審の目を向けた時、その視線に気付いたアンは、ハツとして次の瞬間、自宅モードのアンに戻ったんだって。

アンはすごいなアと私は心底そう思う。だって私って自分の気分本位で、父さんや母さんに合わせようなんて考えたことは殆どない。だからかな。「この子は少し猫っぽいやね」と言われることがある。私ってほんとに犬なの？って思うこともあるけど、その上猫っぽいだなんて全く失礼な話だ。マ・イイか！

アズちゃんは和菓子の子で、あずきのアズちゃんなのだ。アズちゃん、この頃云えないけど元気にしてるかな。どうして会えないかと言えば、それはつまり私に問題があるのだ。いつだったか白状したことがあるけど、私は散歩が嫌い。だってリードに支配されて、決まった道をわき目もふらずに歩く

なんていうのは、私の性に合わない。大体散歩っていうのは気の向くまゝブラブラすることなんですよ。だから父さんや母さんに従わない限りアズちゃん家になかなか行けない。

そうそうこの前の雪おろしの雷はとんでもない大暴れだったけど、大丈夫だった？アズちゃんは神経が細やかで敏感だから、大風や雷が大嫌いなんだね。その点私は「この子は利口なんだかアホなのか」と母さんに言われるくらい（アツまたピカピカゴロゴロ騒いでいるな）と思うだけで、それもマ・イイかなのだ。アズちゃんは小さい頃から雷が苦手で、逃げ惑ったあげく、お風呂に飛び込んでしまったこともあったよね。幸いお風呂が空っぽだったから事無きを得たけど、ブルブル震えているあなたを見つけた御主人は、ホツとするやら笑うやら、それは大変だったと思うよ。

アズちゃん。あなたの大切な大好きな御主人が居なくなってしまうって、大丈夫？この半年程は入院もあったけど、家ではアズちゃんと同じ空間で過ごすことが多かったんだよね。とうとう「その時」が来て、お別れしてしまっただね。

まだ大丈夫と安心していたウチの父さん母さんもさすがに驚いて、しばらくはピンと来ない様子だったもの。そしてこれはやっぱりマ・イイか、とはいかないんだな。